

■ 1) 情報交換 4 点

▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

まちづくりの交流拠点名古屋都市センターとして、夏休み期間中に、子どもがまちと関わる「面白い」、「参加できる」企画を！と実施。子どもたちが自ら考えて作ったまちの中で、遊びながら学び、まちを身近に感じることができることを目的に、次の4つ観点から企画した。

①夏休み期間中を通した企画、②自ら参加機会のある体験型、③模型ではなく、実際のまちを体感できるスケール、④まちを身近に感じ、まちの仕組み、コミュニケーション等を、遊びながら考える機会

② なし

▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

初めての試みであったため、試行錯誤だった。センターホームページに掲載するとともに、市内の児童館、学童保育所、トワイライトスクール（放課後学級）にチラシを配布した。子どもの興味を引くような、キャッチコピーやデザイン、マスコットキャラクター等を工夫した。

準備期間不足もあり、市内小学校への配布手続きに入れず、途中参加の子どもの親から、もっと大々的に広報してほしいとの申し入れもあった。

▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

<工夫した点>

・まちの制作ワークショップでは、「商店街ってなんだろう」という導入時間を設け、その後、子ども達が考え、グループごとに話し合い、まちを制作した。技術的な面では学生がサポートした。

・子どもたちは、「まち制作のやりたい作業や「まち遊びのやりたいお店」を、ハローワークの募集チラシや町長の呼びかけの中から、自分で選択した。

・センター職員は、役場や道具屋として、「困ったとき」のチョイ相談役に徹し、学生は子ども目線で、子どもの自由な発想を実現する際のサポート役をした。

・センター職員も学生も、「町長」や「博士」などといった愛称をつけ、子どもたちと横の関係を築いた。

<課題>

・小さい子どもの参加が多く、子どもと切り離れた「親チーム」について別途の工夫余地がありそう。

・長期間に及ぶ企画となるため、ワークショップやまち遊び開催日以外の日における、子どもの参加方法に工夫が必要。